

運動の重要度と親の運動へのかかわりが幼児の運動有能感の発達に与える影響

森 司朗^{*}, 中本浩揮^{**}, 桐谷昌代^{***}

The effects of importance of physical activity domain and intervention from parent on the developmental perceived physical competence in preschool children

Shiro MORI^{*}, Hiroki NAKAMOTO^{**}, Masayo KIRIGAYA^{***}

Abstract

The purpose of this study was to examine the effects of perceived importance of physical activity for preschool children and message from parent to child on the perceived physical competence and motor ability. Participants in the study were preschool children and their parents (85 families). The tasks administered to preschool children included the following three measurements; measurement of perceived importance of three domains (physical activity, cognitive competence, peer acceptance), measurement of physical competence, and motor ability test. For parents (mothers), two questionnaires were administered; measurement of perceived importance of children for three domains (physical activity, cognitive competence, peer acceptance) and the message from parent to child (acceptance /approval, value, support).

Path analysis revealed that physical competence was related to motor ability. Additionally, perceived physical competence was positively influenced by perceived importance of physical activity for children, and negatively influenced by intervention of acceptance/approval from parents. Intervention of acceptance/approval from parents was buffered by the importance of physical activity for parent. Moreover, the sex difference was admitted of Path diagram. The findings suggested that the effect of perceived importance of physical activity in preschool children might play a role in enhancing motor ability and physical competence.

目 的

昨今、幼児及び児童・生徒の体力・運動能力は年々低下の傾向を示している(文部科学省体育局体力・運動能力調査報告, 東京都教育委員会東京都児童・生徒の体力・運動能力調査報告)。この原因の一つとして、生活環境の変化に伴う運動遊びの減少などが考えられてきた。また、この運動遊びの減少は子どもの体力・運動能力の低下だけでなく、対人関係やパーソナリティの形成などのような心理的な発達にも影響を与えていることが

報告されている(例えば、杉原ら¹⁷⁾)。このように、運動遊びが心身の発達に果たす役割からして、現代の子どもへの健全な発達にとっては、運動遊びの機会を増やしてやることが重要であると考えられる。

実際、幼児期の運動遊びなどの運動経験は、パーソナリティの中核になる自己概念の形成に影響を及ぼしているといわれている。特に、運動経験の中で認知する運動有能感は、認知心理学的な視点から自己概念の形成に重要であることが指摘されている(例えば、Mori and Sugihara¹³⁾)。このよう

^{*}鹿屋体育大学

^{**}鹿屋体育大学大学院

^{***}東京都荒川区立南千住第3幼稚園

に幼児期は、運動経験を通して自己の有能さを認知することで肯定的な自己概念の形成につながり、結果としてポジティブな行動傾向へとつながっている。逆に、運動経験の中での自己の無力さの認知は、否定的な自己概念の形成につながり、結果としてネガティブな行動傾向へとつながっていく。つまり、幼児期にどのように自己の有能さを認知するかが、その後のパーソナリティの形成にも運動能力にも大きな影響を与えているのである。この点、Jongmans⁸⁾は、運動能力と自己認知は発達過程を通じてお互いに相互作用しあうと指摘している。このように、幼児期は有能感の多くを運動の経験を通して認知しているのである。

Mori and Sugihara¹⁴⁾は、運動経験の質的な側面について直接観察法から得られた幼児の日常の身体活動パターンが運動能力と運動有能感に与える影響に関して調べた。その結果、幼稚園で活発な身体活動を体験している幼児は、体験していない静的な遊びを好む幼児に比べて運動能力や運動有能感が高いことを報告している。日常の身体活動の経験の中で幼児が活発な身体活動を選択することは、日々の生活の中で、身体活動に興味、関心や重要性を感じているためだと考えられる。つまり、運動に関して、興味や関心、重要度の高い幼児ほど、身体活動を好み、結果として運動能力に影響を及ぼしていることが推測される。このように、幼児が自分で運動をすることが重要であると捉えることが、運動有能感を高め、結果として運動能力などの運動発達に影響を及ぼしていると考えられる。一方、この重要度に関して藤崎⁴⁾は、Harter & Pike⁵⁾に基づいて桜井・杉原¹⁰⁾が作成した幼児用の認知されたコンピテンス尺度のうち、学習面・運動面・仲間からの受容の3領域について、自分にとってどの程度重要であると捉えているかを測定し(藤崎³⁾)、コンピテンスの自己評価である現実評価と重要性評価との関連を検討した。その結果、現実評価が重要性評価を上回っていることが認められたが、両者間に有意な相関は認められなかった。また、運動面に関して男児

は女児よりも重要度が高いことや運動、仲間、学習の領域間が独立していることが報告されている。このように、幼児においては、3つの領域相互に独立して重要度を捉え、さらには現実評価との関連性は認められなかった。しかしながら、藤崎³⁾の研究では、現実の自己評価である有能感と重要度との関連について着目して研究を進めているが、これまで運動面での研究で指摘されてきた運動有能感とポジティブな関連のある運動能力との関連に関しては明らかにされていない。そこで、本研究では、幼児の遊びの中で認知している幼児の運動に関する重要度が運動有能感及び運動能力とどのように関連するかについて明らかにすることを第一の目的とした。

さらに、親が子どもの意欲や効力感、しつけに対して重要なモデルの役割をしているという報告(桜井¹⁵⁾、東¹⁾、松田・鈴木¹⁰⁾¹²⁾、松田ら¹¹⁾)やスポーツをおこなう子どもの認知や情動に与える影響として親の信念や態度、行動が影響しているという報告もある(例えば、Brusad²⁾)。幼児期は、ピアジェの考えに従うと前操作期の段階であり、まだ自己を知覚するスタイルとしては自己中心的な傾向にある。その結果、現実的でない過大な自己評価を招いている(金城・前原⁹⁾)。また、運動に対する有能感や仲間からの受容感と母親からの受容感によって支えられている(桜井¹⁵⁾)。このように、幼児の運動有能感や幼児の運動の重要度の背景に、母親の存在が大きな影響を及ぼしていると考えられる。そこで、母親のかかわりや運動への考え方(重要度)が幼児の運動有能感や運動重要度とどのように関連があるのかを明らかにすることも目的とした。

以上の点から、本研究では、全変数の尺度得点を算出し、運動能力を従属変数としたパス解析によって、子ども及び親の重要性評価や親の関わり、また運動有能感といった独立変数との間にどのような因果関係が見られるかを検討した。

方 法

1. 被験者

A 幼稚園 (50名: 男25名, 女25名) および B 幼稚園 (35名: 男17名, 女18名) の年長児クラスの幼児85名とその母親を被験者とした。幼稚園側および家庭に関して前もって, 研究の意義など説明し, 研究の同意を得て調査した。

2. 調査内容

1) 幼児に対する調査

(1) 幼児運動能力検査

東京教育大学心理学研究室作成の幼児運動能力検査の25m走, 立ち幅跳び, 両足連続跳び越し, ソフトボール投げ, 体支持持続時間の5種目を行った。測定された記録は, 杉原ら¹⁸⁾が作成した男女別・年齢別の幼児の運動能力判定基準表により, 5段階の評定点を用いて処理をおこなった。

(2) 幼児の運動有能感尺度

本研究では Harter & Pike⁵⁾の定義に基づき, 有能感を「自分の行為に対する自己評価」であり, 「自分は ができる」という自己知覚であるとした。そのため本研究では, 杉原ら¹⁷⁾による改訂運動有能感尺度を用いた。

この尺度は, 幼児が質問内容を理解しやすいように運動経験の内容を具体的に3つの連続した絵で示された尺度で, 「どっちの子に似ているかな」というゲーム形式で実施される。測定種目は, なわとび, かけっこ, 鉄棒, ボールとり, 跳び箱, のぼり棒, 水遊び, うんていの8種目であった。1枚の絵カードには, 各種目の運動に対して有能感を持っている子どもと有能感をもっていない子どもの2種類の様子がそれぞれ3枚の連続した絵で示されている。8枚のカードのうち, 4枚はその運動に関して有能な子どもの絵が右側に描かれており, 残りの4枚は左側に描かれている(端から, 大・小・小・大の順に配列)。2種類の絵の下にはそれぞれ2つの円が描かれていた。この2つの円は, 円の上に描かれている行動の程度や頻

度を大きさによって表現したものである。被験児は最初に2つの絵のうち一方を選択し, 次に, 選択した絵の下に描かれている大小2つの円のうち一方を選択する。幼児の回答には2回の2件法による4段階評定で, 有能感の高い回答から順に, 項目ごとに4点, 3点, 2点, 1点と得点化した。

(3) 幼児の重要性尺度

Harter & Pike⁵⁾に基づいて桜井・杉原¹⁶⁾が作成した幼児用の認知されたコンピテンス尺度のうち, 学習面・運動面・仲間からの受容の3領域について, 自分にとってどの程度重要であると捉えているかを測定する重要性尺度(藤崎³⁾)を用いた。

3領域についてのコンピテントな子ども(学習面については, 「絵の上手な子」「パズルの上手な子」, 運動面については「走るのが速い子」「ジャングルジムに登るのが上手な子」, 仲間関係については「園庭で遊ぶ友だちがたくさんいる子」「遊びに誘ってくれる友だちがたくさんいる子」)のうち, 異なる2領域の子どもを图示した6枚の絵カードを呈示し, 「どちらの子のようになりたいか」を尋ねる二者択一の方式で回答を求めた。絵カードは, 領域別に選択された数を重要性評価の得点とみなし, 最大で4点とした。

2) 母親に対する調査

(1) 母親の重要性評価

幼児の重要性評価とおなじ項目について質問した。幼児の面接法とおなじ順番に質問を並べ, 異なる2領域が得意な子のうち, 自分の子どもにどちらの子のようになって欲しいかを尋ねた。回答は, それぞれの問いに対し, 二者択一で行い, 全部で6問を実施した。絵カードは, 領域別に選択された数を重要性評価の得点とみなし, 最大で4点とした。

(2) 幼児の運動場面における母親の関わり方

武田・中込¹⁹⁾の親の行動に伴うメッセージの項目を参考にして, 幼児の運動場面に関する質問に書き換え, 幼児の運動場面における母親の関わり方を尋ねた。親の行動に伴うメッセージの項目は,

擁護要求の自信強化メッセージ5項目, 援助メッセージ5項目, 成就欲求の結果志向メッセージ2項目, 情動評価メッセージ2項目, 支配欲求の価値メッセージ3項目の計17項目について尋ねた。回答はそれぞれの文に対して, 「よくあてはまる」から「まったくあてはまらない」の4段階評価とした。

3) 手続き

幼児の運動能力の測定に関して, A幼稚園では1日, B幼稚園では2日に分けて行った。それぞれの種目は, 実施前に「ここでは のゲームをするよ」と教示を与え, 良い見本・やってはいけないことを説明した。その後, クイズ形式で良いやり方・悪いやり方を幼児に確認して順番に実施した。幼児の運動有能感と重要性評価の測定は, 個人面接によって実施し, 2つの測定は同じ実験者によって連続して行われた。母親に対する調査は質問紙で実施し, 2つの幼稚園それぞれで担任から配布してもらい後日回収した。

4) 分析方法

パス解析に関しては, SPSS の Amos5.0 を使用し, 男女を込みにして分析を行った。

結 果

全変数の尺度得点を算出し, 運動能力を従属変数としたパス解析によって, 子ども及び親の重要性評価や親の関わり, また運動有能感といった独立変数との間にどのような因果関係が見られるかを検討した。但し, パス解析において, 幼児および母親の全調査項目の中に欠損値のある被験者は分析から削除した。そのため, 本分析で用いた分析対象者は男児27名, 女児28名の総計55名となった。

1) 運動能力テスト及び運動有能感

運動能力テスト, 運動有能感の平均と標準偏差を Table 1 と Table 2 に示した。運動能力の得点として, 各項目の合計を求めた。同様に, 運動有能感についても各項目の合計点を運動有能感の得

Table 1 運動能力の得点

		25m走	立ち幅跳び	両足連続 跳び越し	ソフトボール 投げ	体支持 持続時間	合計点
男児	平均(点)	3.26	3.19	2.67	2.81	2.59	14.37
	標準偏差	0.94	0.83	0.88	0.89	0.69	2.94
女児	平均(点)	3.50	3.11	2.86	2.93	2.61	15.00
	標準偏差	0.88	0.83	0.71	1.01	0.96	3.07
全体	平均(点)	3.38	3.15	2.76	2.87	2.60	14.69
	標準偏差	0.91	0.83	0.79	0.96	0.83	2.99

Table 2 運動有能感の得点

		なわとび	かけっこ	ボール とり	鉄棒	跳び箱	のぼり棒	水遊び	うんてい	合計点
男児	平均(点)	2.93	3.70	3.30	3.15	3.22	2.33	3.48	3.22	25.33
	標準偏差	0.92	0.61	0.87	1.20	0.89	1.18	0.89	0.89	4.44
女児	平均(点)	3.29	3.68	3.50	3.04	3.04	2.46	3.75	3.29	26.04
	標準偏差	0.81	0.55	0.58	1.17	0.84	1.04	0.44	0.81	3.52
全体	平均(点)	3.11	3.69	3.40	3.09	3.13	2.40	3.62	3.25	25.69
	標準偏差	0.88	0.57	0.74	1.17	0.86	1.10	0.71	0.84	3.98

点とした。性差を検討するために各得点に関して、対応のないt検定を行ったが、有意な差はどの項目にも認められなかった。よって、男女混合（全体）の得点を以降の分析に使用した。

2) 子ども及び親の重要性評価

子ども及び親のそれぞれの重要性評価の得点の平均と標準偏差を Table 3 に示した。子どもの重要性評価の得点に関して、性差を検討するために対応のないt検定を行った。その結果、運動面の重要性に関して、有意な差が認められたが ($t = 2.43, p < .05$)、他の項目に関しては有意な差が認められなかった。また、3つの領域間の差に関して、有意差が認められた（全体； $F(2, 225) = 29.201, p < .000$, 男児； $F(2, 120) = 28.261, p < .000$, 女児； $F(2, 102) = 9.083, p < .000$ ）。そこで、Tukey HSD の多重比較を行ったところ、全体及び女児では学習面が他の領域に比べ有意に低く ($p < .05$)、さらに、男児では、運動面が最も重要度が高く、次いで仲間関係、学習面の順で有意に高くなっていった ($p < .05$)。また、重要性評価の3領域間の関連に関しては各領域別に負の有意な相関が認めら

Table 3 子ども及び親の重要性評価

		運動面	学習面	仲間関係
子ども (男児)	平均(点)	2.70	1.22	2.07
	標準偏差	0.95	0.70	0.96
子ども (女児)	平均(点)	2.07	1.46	2.46
	標準偏差	0.98	0.74	0.96
子ども (全体)	平均(点)	2.38	1.35	2.27
	標準偏差	1.01	0.73	0.97
親	平均(点)	1.27	0.98	3.75
	標準偏差	0.93	0.91	0.73

Table 4 重要性評価と運動有能感の相関係数

		相関係数		
		運動面	学習面	仲間面
男	児	.11	.28	.12
女	児	.25	.19	.09
全	体	.09	.20	.08

れた（全体； $-0.409 > r > -0.650, p < .001$, 男児； $-0.349 > r > -0.659, p < .001$, 女児； $-0.422 > r > -0.600, p < .001$ ）。さらに、重要性評価の3領域と運動有能感の間の関連に関して調べたところ、どの領域とも有意な相関は認められなかった (Table 4)。

3) 子どもの運動場面における母親の関わりに関して

「子どもの運動場面における母親の関わり」についての17項目の質問に対して、最尤法、バリマックス回転により因子分析を行った。まず、因子数を指定せずに行った結果、固有値1以上の因子が5因子抽出されたが、第4因子以下に負荷をもつ項目は、1～2項目と非常に少なく、解釈が不可能であった。そのため、固有値〔第1〕6.65, 〔第2〕1.95, 〔第3〕1.42, 〔第4〕1.13, 〔第5〕1.08) 及び因子の解釈のし易さを考慮し、因子数を3に指定して再度、因子分析を行った。その結果、3因子までで59.9%が説明され、因子負荷量 $|.40|$ 以上の項目の内容について解釈した (Table 5)。第1因子は、「うまくできたら、ほめてあげる」「できなかったことができるようになった時、ほめてあげる」などの褒める行為が含まれる項目で、「受容承認メッセージ」と名付けた。第2因子は、「失敗したら、励ましてあげる」「“きっとできるよ”と声をかける」などの励ます行為が含まれる項目で、「援助メッセージ」と名付けた。第3因子は「“できるように頑張りなさい”と言う」「いつでも努力するようにと言う」などの結果志向や運動遊びだけでなく人生全般にわたって親が有する価値観を伝えるといった行動と解釈できる項目で、「価値メッセージ」と名付けた。

この尺度の信頼性を検討するため Cronbach の係数を求めた結果、全体で .88 と高い信頼性が得られたのをはじめ、因子ごとでも第1因子 .89, 第2因子 .79, 第3因子 .78 と高いものであった。

Table 5 幼児の運動場面における親の関わりの下位尺度

因子	項目	因子負荷量 (バリマックス法)			Cronbach a
		因子 1	因子 2	因子 3	
受容承認	うまくできたら「よくできたね」とほめる。	.95	.16	.17	.89
	うまくできたら、ほめてあげる。	.86	.16	.12	
	以前よりうまくなった時、ほめてあげる。	.77	.18	.11	
	できなかったことができるようになった時、ほめてあげる。	.72	.29	.09	
	失敗しても、「よく頑張っていたよ」と声をかける。 「(運動遊び)上手だね」と声をかける。	.55 .54	.46 .39	.07 .15	
援助	失敗したら励ましてあげる。	.35	.77	.18	.79
	「きっとできるよ」と声をかける。	.25	.64	.19	
	「今よりもっとうまくなるよ」と言う。	.08	.62	.24	
	「できるようになるといいね」と声をかける。	.30	.45	.34	
価値	「できるように頑張りなさい」と言う。	.06	.04	.71	.78
	いつでも努力するようにと言う。	.19	.25	.69	
	一生懸命やってみるように言う。	.21	.37	.67	
	努力することが大切だと思う。	.38	.31	.45	

4) 運動能力を説明する因果モデル

運動能力の結果を最終的な従属変数として用い、それを因果的に説明するパス解析を行った。パス係数は標準化偏回帰係数を用い、有意であったパスのみをダイアグラムに示した。分析に関して、幼児の重要性評価の運動面において、性差が見られたため男児 (Figure 1)、女児 (Figure 2) 別と全体 (Figure 3) のすべてのパターンに関してパス解析を行った。

男児においては、運動能力に対して、直接関連が見られたのは運動有能感のみであった ($\beta = .50, p < .01$)。この運動有能感に対して、子ども

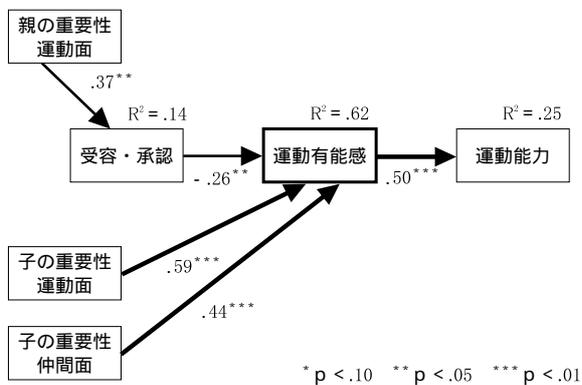


Figure 1 男児の運動能力に関連する要因のパスダイアグラム (有意なもののみ)

の重要性評価の内、運動面 ($\beta = .59, p < .01$) と仲間面 ($\beta = .44, p < .01$) の2つに正の有意なパス係数が示された。また、子どもの運動場面にお

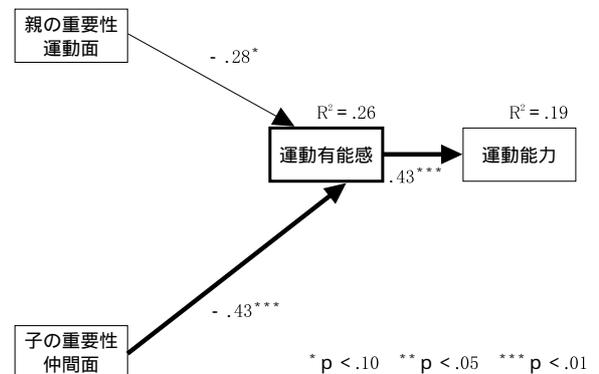


Figure 2 女児の運動能力に関連する要因のパスダイアグラム (有意なもののみ)

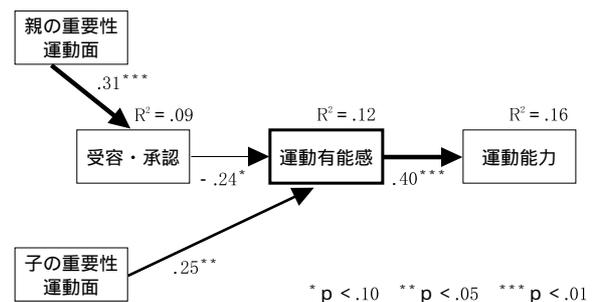


Figure 3 運動能力に関連する要因のパスダイアグラム (有意なもののみ)

ける親の関わりのうち、受容承認に負の有意なパス係数が示された ($\beta = -.26, p < .05$)。この受容承認に関して、親の重要性評価の内、運動面のみが直接的な正の関連を示した ($\beta = .37, p < .05$)。

女兒においては、男児と同様に、運動有能感が運動能力に正の影響を及ぼすことが確認されたが ($\beta = .43, p < .01$)、運動有能感に直接関連する要因は、男児が重要性評価の運動面と仲間面であったのに対し、女兒は重要性の仲間面が運動有能感に影響を及ぼしていた ($\beta = -.43, p < .01$)。また、男児においては、親の重要性評価の運動面は、受容承認を介して運動有能感に影響していたが、女兒においては、直接、運動有能感に影響を及ぼし、その影響は負であった ($\beta = -.28, p < .10$)。

全体においても、運動能力に対して直接関連するのは運動有能感のみであった ($\beta = .40, p < .01$)。この運動有能感に対して、子どもの重要性の内、運動面に有意なパス係数が示された ($\beta = .25, p < .05$)。また、子どもの運動場面における親の関わりのうち、受容承認メッセージのみが運動有能感と負の関連が見られ ($\beta = -.24, p < .10$)、さらに親の重要性の運動面と有意なパス係数が示された ($\beta = .31, p < .01$)。

考 察

1) 運動の重要度と運動有能感の関連

幼児自身が運動、学習、仲間からの受容の3領域についてどの程度重要であるかを感じているかを調べたところ、学習面が最も低い得点を示した。また、男児では運動面が他の2領域に比べて有意に得点が高いと同時に、女兒に比べて有意に高かった。これらの結果は、藤崎⁴⁾の結果と類似しており、男児と女兒では重要度に関して異なる傾向にあることが示唆された。しかしながら、3つの領域間に関連が認められなかったとする藤崎⁴⁾の結果と異なり、3つの各領域間に負の有意な相関関係が認められた。このことは、本研究においては、

幼児にとって重要であると捉える運動面、学習面、仲間からの受容という領域は相互にマイナスの関係で関連しており、対称関係にあることが示された。また、運動に関して捉えている重要性和現在の運動に関して認知している有能感の間の関連に関しては、現実評価である運動に関する有能感のほうが運動重要度よりも得点が高かったが、関連性は見られなかった。本研究では現実の自己評価に関しては運動面に限定して調査したが、4領域(学習面、運動面、仲間からの受容、母親からの受容)の有能感と関連を捉えた藤崎⁴⁾と類似した結果を示していた。

2) 運動の重要度と親の運動へのかかわりが幼児の運動有能感と運動能力に与える影響

これまで、幼児期の運動能力と運動有能感の間には関連があることは報告されてきた。本研究では、このように運動能力と関連する運動有能感の発達に関して、幼児自身のもつ運動への重要性和母親のかかわりや運動への重要性和という要因が影響していると考え、その因果関係を想定したモデルについて、運動能力を従属変数としてパス解析を用いて分析を行った。

現実の自己評価である運動有能感と重要度の間には藤崎⁴⁾の結果と同様、関連は見られなかったが、運動能力を従属変数としてパス解析を行ったところ、運動有能感の発達に関して幼児の持つ運動の重要性和が影響していることが明らかになった。このことは、運動に関する重要度の高い子どもほど運動の有能感は高くなり、結果として運動能力へと影響しているという因果関係が明らかになされた。しかしながら、幼児の運動の重要性和の背景に母親の運動への重要性和や子どもへのかかわりが関連していると仮定したが、結果的には相互に関連性は認められなかった。Harter⁶⁾は運動有能感のような領域に特異的な有能感とは別に、自己価値の全体的な感情の発達も仮定している。それによれば、だいたい8歳までに、子どもたちは自己価値の全体的な感情について認識することができる

ようになる。全体的な自己価値を決定するのに重要な役割を演じる2つの主な構成要素は、成功度と重要性である。例えば、自分にとって重要性のある領域において成功度が低ければ、全体的自己価値は当然低くなる。こうした状況に関して、Harterは苦手な領域を割り引いておく可能性を仮定している。この観点からすると、運動が自分にとって重要であると認知した幼児にとって、運動経験の中での成功度につながる運動の有能感も高くなり、運動を行う機会を増やし、結果として運動能力の発達に影響を与えることになる。このことは、Mori and Sugihara¹⁴⁾が報告したような運動有能感や運動能力の発達に影響を及ぼしている日常の身体活動パターンが活発な幼児は運動に関する成功感を持つと同様に、その背景に本人が持つ運動に関する重要性が影響している可能性が考えられる。また、幼児の運動に関する重要度が運動有能感に影響を与え、運動能力の発達に関して影響を及ぼしたことに、子どもたちが身体的活動に関して発達させる主観的感情は運動技能を獲得するうえで重要な役割を果たす⁸⁾という考えにつながるものであると考えられる。

母親のかかわりや母親の持つ運動への重要度が子どもの運動に関する考え、重要度に影響すると考えたが、幼児自身のもつ運動の重要度には関連を持たず、母親のかかわりの中で「うまくできたらほめてあげる」というような「受容・承認」というかかわりだけが直接運動有能感と関連していたが、パス係数がマイナスであった。このことは、幼児への運動に関するかかわりが受容的で承認している母親の子どもは運動に関する有能感は低い傾向を示すことが示唆された。さらに、この「受容・承認」の因子に関しては母親が自分の子どもに運動がうまくなってほしいとする重要度とこの因子のみがパスでつながっており、自分の子どもにとって重要であると捉える母親ほど子どもの運動へのかかわりが「受容承認のかかわり」をとるが、その背景には、運動能力が高くなく、運動に関して有能感を認知できない我が子に対して有能

感を持ってもらいたいとする親の願いがかかわっている可能性が示唆された。このように、親として子どもの運動有能感の発達にかかわろうとしても、子どもの運動能力のような結果のみを捉えてしまい、その過程に注目しなくなると、かえって運動有能感の発達に負の影響を与えてしまう可能性がある。この点と同様なことを、Harter⁷⁾は、両親の肯定的な反応は、ものごとを達成しようという試みの結果だけに限るべきでなく、ものごとを達成する過程にも与えるべきであると述べている。

さらに、この関連は男児、女児では異なる傾向を示した。男児においては、運動能力に対して、直接関連が見られたのは運動有能感のみであり、この運動有能感に対して子どもの運動面と仲間からの受容に関する重要度に関して関連が示された。また、子どもの運動場面における親の関わりでは、受容承認に関して負の関連で運動有能感との関係が認められ、その背景に親の運動面への重要性が影響していることが示された。このことは、藤崎(1997)の結果と同様に、男児では運動面が他の2領域に比べて有意に得点が高いと同時に、女児に比べて有意に高く、運動への重要度の高い男児は、現実の運動面に関する自己評価である運動有能感に影響を与え、結果として運動能力の発達に影響していることが示唆された。仲間からの受容が正のパスでつながっていることに関しては、男児においては、運動能力と運動有能感の高い幼児は、運動面を重視しており、仲間にも受け入れられていることが重要であると捉えていると考えられる。また、女児においては、男児と同様に、運動有能感が運動能力に正の関連を示し、運動有能感に直接関連する要因としては仲間からの受容が負の影響を及ぼしていた。藤崎の研究では、仲間に入れられることを重視している子どもは、実際に仲間に入れられておらず、運動能力も高いとみなされていなかった。本研究の結果においても仲間に入れられることを重視する幼児は、運動有能感が低く、結果として運動能力が低

い傾向が認められた。親の運動面の重要性に関して、男児とは異なり、かかわりを介さずに直接運動有能感に負の方向で影響していることは、運動をすることがうまくないと捉える親ほど運動に関して重要性を感じていることを示していると考えられる。このように男児・女児では運動有能感自体には差は認められなかったが、運動能力を従属変数として捉えた場合、運動有能感の発達に影響する要因に関して性差が認められた。

引用文献

- 1) 東洋 (1994) 日本人のしつけと教育 発達の日米比較にもとづいて. 東京大学出版会
- 2) Brustad, R.J.(1988) Affective outcomes in competitive youth sport: the influence of intrapersonal and socialization factors. *J. Sport & Ex. Psych.* 10 : 307-321.
- 3) 藤崎真知代 (1995) 幼児期から児童期におけるコンピテンスの発達(5) - 幼稚園年長時から小学校4年時にかけての変化 - . 日本教育心理学会第37回総会発表論文集 : 445.
- 4) 藤崎真知代 (1997) 幼児のコンピテンスの発達を規定する要因 - 仲間と保育者の及ぼす影響 - . 群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編 46 : 439-460.
- 5) Harter, S. and Pike, R. (1984) The pictorial Scale of Perceived Competence and Social acceptance for Young Children. *Child Development*, 55 : 1969-1982.
- 6) Harter, S. (1999) *The Construction of the Self-A Developmental Perspective*. The Guilford Press, New York, pp.142-165.
- 7) Harter, S. (1978) Effectance motivation reconsiders: Toward a developmental model. *Human Development*, 1 : 34-64.
- 8) Jongmans M. (1999) 第3章 協調運動の苦手な子どもたちの自己認知. pp 109-125. 辻井正次・宮原資英 (編著) 子どもたちの不器用さ - その影響と発達の援助 - , ブレーン社.
- 9) 金城洋子・前原武子 (1991) 幼児における自己能力評価 認知能力および教師評定との関係 - 教育心理学研究 39(4) : 400-408.
- 10) 松田惺・鈴木眞雄 (1988) 家庭環境及び親の養育態度と児童の効力感. 愛知教育大学研究報告37 教育科学編 : 87-100.
- 11) 松田惺・鈴木眞雄・富永健司 (1989) 親の子育てについての信念体系の検討 - 子どもへの効力感との関連から - . 愛知教育大学研究報告38 教育科学編 : 113-132.
- 12) 松田惺・鈴木眞雄 (1990) 子どもの効力感の発達 - 親の信念体系との関連から - . 愛知教育大学研究報告39 教育科学編: 73-82.
- 13) Mori S. and Sugihara T. (1999) Relationship between perceived physical competence and physical activity among young children. 3rd ASPASP pp.252-254.
- 14) Mori S. and Sugihara T. (2003) Relationship among physical activity patterns, Perceived physical competence, and motor ability in preschool children. *Canadian Society for Psychomotor Learning and Sport Psychology*, 129.
- 15) 桜井茂男 (1997) 学習意欲の心理学 自ら学ぶ子どもを育てる. 誠心書房.
- 16) 桜井茂男・杉原一昭 (1995) 幼児の有能感と社会的受容感の測定. *教育心理学研究*, 33(3) : 237-242
- 17) 杉原 隆・森 司朗・中村和彦 (1998) 運動遊びが幼児の心理的発達に及ぼす影響. 平成7~9年度文部省科学研究補助金(基盤研究C)研究報告書(研究代表者 杉原 隆).
- 18) 杉原 隆・森 司朗・吉田伊津美・近藤充夫 (2004) 2002年の全国調査からみた幼児の運動能力. *体育の化学*54(2) : 161-170.
- 19) 武田大輔・中込四郎(2003) 子どもに対する親の行動に伴うメッセージと競技における子どもの認知・情動的態度との関係: ジュニアサッカー選手を対象として. *体育学研究*, 48 : 421-438.